

Title	デイル、モンバルト共編 社会主義的重要文献宣言綱領集成
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.7 (1922. 7) ,p.1043(155)- 1047(159)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220701-0155">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220701-0155</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

したものを一括して科學と呼んだのであるが、其組織的知識の集團も様々の不都合よりして、漸次分化するに至り、學と術との間に何等かの差別を設くるに至つたと云ふに在る。現にミルは、經濟學原理の序論に於て次の如く述べて居る。「人事の凡ゆる部門に於て、實際の科學に先立つたことは、久しいものである。自然力の活動様式に關する組織的研究は、夫等自然力を實用の目的にて使用す可き努力の長い過程に於て遅々として生じた産物である」(註13)

扱て以上は、序論とも云ふ可きものである。是れより愈々ミルは、得意の論法を鋭くするのである。依つて私は、次にミルが當時一般に是認せられた經濟學の定義を批評した處を窺ひ、續いて彼自身の與へた斯學の定義を紹介することをしやう。

(註1) 福田博士著「改定經濟學講義」第一卷七頁乃至八頁

(註9) J. S. Mill, Principles of Political Economy, p. 1 (Preliminary Remarks)

(註10) Mill, Principles, p. 2.

(註10) H. Y. Edgeworth 氏は曰く、「第五の論文に於て取扱つた經濟學の定義は、餘りに簡明であるとは云ひ難いが、經濟學原理の序論に於て採用せられて居る斯學の定義に符合して居る」(Palgrave's Dictionary of Political Economy, vol. II, p. 757.) 尙ほボナー氏も「最初に吾々は廣義に於ける哲學に觸れる所の問題、即ち定義と研究方法との問題に遭遇する。詳言すれば、吾々は、如何に經濟學を定義す可きか、而して斯學の範圍と研究方法とは如何。是等の問題は實は、經濟原理の文脈の間に於て常に會得す可きではあるが、併し經濟學原理の如何なる部分に於けるよりも、論集の第五の論文及び論理學體系の第六編に於て一層詳細に取扱はれて居る」と云つて居るのに徴するも、經濟學の定義に對するミルの見解を窺ふためには、經濟學原理を右の論集とを併せ讀む必要があると思ふ。(Bonar, Philosophy and Political Economy, p. 241.)

(註11) J. S. Mill, Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy, pp. 120-122.

(註12) J. S. Mill, Es-ays, p. 122.

(註13) 大西猪之助氏著「國はたつた經濟學」一四八頁乃至一四九頁

(註14) J. S. Mill, Essays, pp. 122-123.

(註15) J. S. Mill, Principles, p. 1.

Alfred Marshall, Principles of Economics, 7th edit. Chapter I, § 3, p. 4.

(註2) 福田博士著前掲「經濟學講義」八頁乃至九頁、A. Marshall, Principles, pp. 4-5.

(註3) Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy, p. 122-123. 一八二九年乃至三〇年の間に執筆されたもので、其中第五の論文のみは一八三三年訂正を施して一八三六年十月の The London and Westminster Review 誌上に公表されたものである。(Preface to the first edition of the Essays, James Bonar, Philoophy and Political Economy, 2nd edit. 1909, p. 239. J. S. Mill, Autobiography, p. 180.) 尙ほ之れの語る所に依れば、此論集は公刊してから云ふ何等直接の目的を以て執筆せられたものではない。併し其後或書肆に右の論集の原稿を渡して出版させやうとしたが、其主人の拒む所となつた。然るに一八四三年論理學體系(A System of Logic)の公刊が案外世人の好評を博したので、右の論集も僅かに公刊の機會を得たのである。(J. S. Mill, Autobiography, p. 180.)

(註4) Henry Sidgwick, Principles of Political Economy, 3rd edit. 1901, p. 1.

(註5) J. S. Mill, Principles of Political Economy, edited by W. J. Ashley, 1917, pp. xxvii-xxviii.

以下經濟學原理の引用は、アマゾン版に據る。

### 新刊紹介

デニール 共編社會主義的重要文獻

宣言綱領集成

社會科學の研究において所謂文獻的研究の必要なのは、こゝに喩々するを要さない。然かも幾千、幾百の星霜を経た社會諸科學の文獻的研究を行ふのは、殆んど人間の一生を捧げても猶ほ足らざる感なきを得ない。この文獻的研究において先づ主要な文獻を閱讀することが、吾々初歩の研究者にとつて最も必要であり、且つ便宜であると思ふ。この意味において、私はデニール並にモンヘルト兩教授の經濟學研究選集の出版を多々せんを得なう。同叢書は原名を *Ausgewählte Lesestücke zum Studium der Politischen Ökonomie*. Herausgegeben und eingeleitet von Karl Diehl und Paul Mombert. *ユズル* 既刊の

分既に十二冊、貨幣、賃銀、地代、價值並に價格、人口、恐慌、資本利子並に企業利潤、自由貿易並に保護關稅、社會主義共產主義並に無政府主義の諸項を包含してゐる。今私がこゝに紹介しやうとするところは、その最近の刊行(一九二〇年)の第十一冊並に第十二冊である。第十一冊は社會主義、共產主義並に無政府主義の主要な代表者の著作を、第十二冊は宣言綱領を載せてゐる。この種の編輯はこれを唯一主要なものとするべきではない。獨逸經濟學界の社會主義研究の第一者を以て目せらるる Werner Sombart の Grundlagen und Kritik des Sozialismus 1919 なる書を刊行し、上はプラトリーの國家論から下はレーニン、ブハリンのボルシェヴィズムに至る社會主義的文献並に國際社會主義運動の宣言書、社會主義批評の重要文献を集録してゐる。私は今兩者の長短を比較する程の識見も持たないが、分量の割に諸種の貴重なる文献、宣言書を集め、且つ定價も安いデイル・モンベルトの方がよいか、いやりに思ふ。デイルは人も知らず、手段共に共有とする(三、土地社會主義(土地財産のみに對する共有の主張)がこれである。デイルの本書はこの無政府主義並に集産主義の主要諸國における重要文献宣言等を大集成したものである。

先づフランスの大家から始まる。Babeuf はフランス大革命當時の共產主義の代表者で、ルソンの平等論に社會主義的共產主義的學說を結び付けた人である。彼の共產主義に關しては Buonarroti が彼の一七九六年の陰謀に關する著作に表はれてゐる。こゝに集録されてゐるのは、その著作の中にある die Erklärung der Lehre Babeuf である。次に來るのがサン・シモンの學說であるが、こゝには、L. Stein の Die industrielle Gesellschaft 1855 の一節が載せてある。同じくユートピストとして Cabot があるが、その名著 Voyage en Icarie に書かれた共產主義的信念は同じくシュタインの筆によつて描寫されたものが載せられてゐる。次に宗教的社會主義者として最も有名な Lamennais の一八三七年出

る如く、經濟學說、社會主義の研究において、ゾンバルトの如く、獨逸學界の第一人者を以て許さるる人である。私は今彼の序文によつて、この集成の性質を紹介するであらう。

デイルは先づ社會主義的諸思想の性質を定める。彼はその著 Ueber Sozialismus, Kommunismus, und Anarchismus Zwanzig Vorlesungen. の第一講社會主義の本質並に主要傾向においてなしたやうに、共同生活を法律的強制の有無によつて二つに分ける。法律的強制の伴はざる社會は無政府主義の社會であり、法律的強制の伴ふ社會をその財産所有に關する法制から集産主義的經濟組織と個人主義的經濟組織とする。個人主義的經濟組織とは、經濟生活の基礎として私有財産を認めるものを云ふ。集産主義的經濟組織とは經濟的法制として共有財産を最良なるものとし、又は未來の社會において社會が共有財産に發展するとする思想である。これを分つて三つとする。一、社會主義(生産手段に對する私有財産の廢止)二、共產主義(生産並に消費

版の Livre du peuple の一節を採録する。これらの傾向に反して暴力的革命を主張するものに Auguste Blanqui がある。彼は七月革命並にその以後のあらゆる革命運動に参加し、さうして革命的秘密結社の首領であつた。彼の名著は Critique sociale で、その一節が載せられてゐるが、それは資本主義經濟組織の批評をその一特色とする。Blanqui を掲げたデイルは、直ちに現代に至つて、Jean Javies を掲げ、ルイの革命的サンディカリズム運動史の一節を掲げて佛蘭西の部分を終る。次は英國である。英國における社會主義的文献は豊富であるが、デイルは單に William Thompson 並に James Bronterre O'Brien を擧げ、これに止まつてゐる。この二名のみを以て、英國社會主義的特質を語り得るかは疑問であるが、この種の編輯書には免れ難い缺點であらう。更らに獨逸における社會主義文献の集録を見ると、Weiling, Marx, Boddertus, Lassalle, Bernstein を載せてゐる。マルクスは一八四九年の「賃銀労働と資本」を、ロードペルトスは「標準労働時間

論」を、ラッサルは「労働問題に就て」を載せてゐる。獨逸における社會主義文献は近代的意味においては、ほゞこれで足りると考へられる。ゾンバルトの集録は哲學者ワイヒテをも載せてゐるやうである。マルキシズムの一新型態としてのボルシェヴィズムの文献もこの種の集録には、缺くべからざる重要を有するものである。ディルはその代表としてラデックの「科學より實行への社會主義の發達」ブハリンの「共產主義綱領」を採録する。ゾンバルトはレーニンの「國家と革命」の一節を集録してゐるが共にボルシェヴィズムの重要し文献である。社會主義と對立の概念である無政府主義に關しては、私有財産主義を主張する Pierre Proudhon と、共產主義を主張する P. Kropotkin との文献を掲げる。土地社會主義に對しては Henry George のみを掲げる。この點に就ては、英國土地社會主義者の文献をも集録する必要がないだらうか。但し現代の社會主義から見れば、この點は重大ではないやうである。

更らに第二部綱領の部分を見ると、また各國別に分類されており、この集録の範圍も甚だ當を得てゐるやうである。この點において、ゾンバルト教授の集録よりも秀てゐるやうである。ゾンバルトの集録はマルクス以後における重要な世界的意義のあるもののみを集録してゐて、各國の運動に關する宣言書等は缺けてゐる。またディルの書の一特徴は、マルクスがゴータ宣言批評として一八七五年ブラッケに與へた有名な書翰の載せられてゐることである。この書翰はマルクスの死後始めて、「ノイエ・ツァイト」誌上に掲載せられたもので、ゴータ宣言に對する嚴正なる批判であると共に、マルクスの社會學的思想の重要なものを含んでゐる。即ち近時ボルシェヴィズムの主張である「無産階級の獨裁」なる言葉は實にこの書翰の中に發見し得るのである。「資本主義から共產主義の社會へ移る間には一の過渡期がある。それは一の政治的形態であつて、即ち無産階級の革命的獨裁」が

の有名な章句はこの書翰の一部を形成するのである。この書翰は堺利彦氏によつて「社會主義研究」誌上において翻譯發表された。

ディルの書に發見し得ないのは、社會主義に對する批評である。ゾンバルトの用意はこの點において優さつてゐる。彼は四五の社會主義批評家の文章を採録することを忘れた。要するに、幾多の歲月を経た社會主義文献史の中から、この重要なものを選択することは、甚だ困難である。この點を考へるとき吾々はディル、モンペルトの兩教授に感謝せざるを得ない。

(加田 哲 一)

Lee K. Frankel and Alexander Fleisher: The Human Factor in Industry (The Macmillan Company, New York)

著者 Frankel 氏はメトロポリタン生命保險會社の第三副社長であり、Fleisher 氏は同社の書記補であつて、本書は外に Laura S. Seymour 嬢の補助によつて成つたものである。總ての産

業が資本の勢力によつてなされるが如く信する傾向が盛んであつて、澄徹した頭腦の所有者でさへ理論上資本と労働との協力によることを認めながらも、尙ほ屢々労働よりも資本の勢力を重要視する過誤に陥り易い時に於いて、過般の戰役によりて漸く世界の注視を受くるに至りたる産業に於ける労働の重要なことを主張し労働者に對する福祉施設を單に僱主の利益のみならず、また労働者の利益のみならず、廣く社會から觀察して論斷し、新しき試である Labor Administration に就いてその實際上の施設効果を詳論したものが本書である。

本書は章を分つこと十二、その主なるものは緒論、雇傭關係、教育、労働時間、労働状態、醫療、賃銀支給方法、休養及び娛樂、僱主及び社會、保險貯蓄及び貸借、労働管理部の組織である。評者が本誌本號に於いて「労働管理問題一斑」と題したる一篇は、専ら本書の最初の一章緒論と最後の一章労働管理部の組織との翻譯によつて成つたものであるが、それは決して本書